



秋葉
繪
本金石譚
後
續

3
980
7



遠 13
號 80
卷 7

山田家子戲編

本清

繪本金石鐔後篇卷之七

浪速

祐明寄書二王謀為奪刀餘

山田家子戲編

京都將軍足利義滿公先達より北山小南寂乃地を擇り一宮乃林刹
 在邊管さするまゝ多小邊小百工功を畢院内より更なり三重乃高閣
 及び將軍御物好乃靈沼さする残る方なく成就しなれむ
 御悦斜ある寸近く小諸列乃大小名を集め其家々小秘藏をさす処乃宝
 器を持寄せし展觀し彼楚國乃陶盟會小准へ奉平無敵乃茶立乃角
 丸あふ内々近臣其脚沙汰あり其子付く二ある脚愛臣あれむ濱名乃
 擬本英列を其列小加へら彼鉄丸を以て鍛せしとせし新刀を展觀小
 備金しと蜜々小脚内意有るも英列大り小悦ひ先播才之助り放蕩小依

拜領乃香炉を畠山小買取まされ此度乃御催しふらよ加へり
世小敷くも朽惜りも思ふ斯る御内命こそ難有々れと都乃方を三拜
車乃御會の日を待まざる然るふ無く祐明小加膽せし倭人原早くも
此吏を遣出し祐明が方告々るふと祐明存大の悦び須波究竟の吏を出
まきりと霧原指塚栗林伊沢幾島を始腹心乃惡徒を兩室小集へ
祐明言を發し傳使が將軍家北山乃御別荘に室器展觀乃御催し
有せらる小付英列も其數小如ら且彼清包が作の新刀を展觀し備るた
むの内命有し由是我宿望乃達も命た時即到來せらるり其故如何ゆと
あまむ何とて手段を回し彼刀を盗と取むり密々小あま一且小命下り
し刀今更紛失せしも言上せしや將亦君より拜領乃香炉ハ伊沢ホダ

備小派く畠山殿乃手小入然我亦暗小其價を貸ひく手小入れを以て
上對とてた面皮廢り切腹せん治定り汝達濱名城乃室藏小忍び
入件乃刀を盗と来らむ恩賞ハ乞任とを乞と座中を刃回し云々れも原未
堅固乃城中珠小室藏ハ多賀鳥が頭乃ふく昼夜乃守衛嚴あるを衆人能
知む難有く領録とら者乃互小面を刃合し黙然とら小幾島兵藤
進と出是中これ工吏の先達と示ホ密事乃露頭せん吏を恐む都六角の郎
を遠電仕上當館へ忍び参り後程なく英列帰國あり岩瀬平馬乃弟團平と
追放せしとふより英列を深く恨み阿波が嶽の賊主三王左門と父者乃僞人今乃
名ハ上蟹乃腕九郎と名称ヲ知召り凡平馬を香之助め小討まはむ多賀嶋父
子小遣恨を被り某が方密消息を以て祐明君小自然乃御用もあむ魁

首左衛門を勸く一臂の力を副しめんとして越せり。某又渠が君小加藤せん幸
 究竟の更小思す暇を考へ阿波が嶽の巢穴へ赴り山蟹小就く左工門小
 一面の交り成ちし置い渠赤い青年小い下り萬丈不當乃勇有り上水道の
 術とて壁を穿て一陶の水の中小能姿を隠しし山蟹が物語小承りし
 且渠が素姓を山蟹小探り伺侍り小彼清包が拾子小童の時小又母を捨れ
 逐電しし賊主と成り承る清包小亡りし機密ハ知すし其某賄賂の金
 子并小脚頼の書状を賜ふく阿波が獄小赴り左工門小面會し。彼老婆と欺
 たり及回乃謀を以て英列主従を怨す其上小刀を奪取れしと頼を
 速く更成就ししん鼻啼呼りしを頼に祐明双手を下とせせり
 二王左工門小純しを姓ハ道小侍り賢し人刀を盗と出り人事安らるる

上渠清包が拾子あり及回小乗り英列主臣を怨り冠すん更凶定なり若仕損
 なく英列が為小討まふ。是又我英列が手を借り清包が余頼を亡し後の患
 を除く小當り。一挙兩得の策とて。悦ぶ更限りなく。即時小左工門
 頼の書を認め賄賂の金子百兩と俱小幾島小渡り究り大更乃使者
 ちれを心を責り仕録よ志まも我清包を誅せし更を渠小覚らるる
 往及乃路次中濱名の家士町人百姓小面をみりれと固く緘めれを
 兵藤唯々々々書状金子を受取即時小猿人の跡小身を紛装し管堂小面
 を深く隠し祐明が郎を立行く阿波が嶽ある二王が巢穴小到り山蟹小對面
 祐明が頼の書を左工門小呈しれ。左工門何更おくと閉封し一見し其
 画しり命し。腕九郎心得し頃幾島を伴ひ左工門が

面前の遠未席の座せしむり。左門の熊の敷皮の上の平座。小賊の肩を
 せふ。幾島を視流の足中。祐明殿と申。使ハ仕る此書中の盗とれぬと記
 する刀ハ如何なる名刀如何ある者の制作也。委々ハ使者の字とての文意ハ
 ままハ洋の緒りや。最上と云々。幾島其驕慢の氣を吞まふ
 其の斯くの次第ハいと始英列が千壽が峯の林麓に蛇神を射て鉄
 丸を得し。清包の純一。刀ハ作らむ。餘其後ト者ハ二派有し。一
 云。成信ト清包を石捕多賀島伊織小命ト。跨向を終小獄下小於て
 責殺せり。緘言交々。左門ハ怒を起さ。人と言巧小緒。左
 衛門ハ度毎小教。怒王心中小思。我師ハ矢疵を負せ。英列
 其得し。鉄丸ハ師ハ愛。既の品。故ハ有む。



幾嶋其驕慢祐明
 密書持て三王
 左門ハ景況到る

有し言六せしあらん而のそあ守其鉄丸を我養又小純く刀小鍛ハせか
 府酒易者の忘言を信し又を無美の為小責殺せし毛高恩の師乃仇ある
 のそあ守云育恩の又の仇方々守遺恨重ある概本主臣誓す其肉を生か
 ぐ喰むん飽足じと口小其と云きれも憤怒乃惡相面小顯ハき拳を握
 手を咬鳴せも幾島ハ謀的當せりと心小笑懷中より賄賂の金子取出し
 左五門の座前小置是ハ狂少あが主人祐明より頼進と駿小呈しる所小尚
 彼刀を奪取賜ふ於ハ表謝のしん小檢賞ハ望とま程進しん飽追
 媚縮し云々れも左五門ハ金子小目由中守猶胸の裡小思惟しる室町家の
 展観小備もと内余有刀故盜取れよとの文意を中く考んれを英列小自滅
 させく祐明家國を押領せんとの巧とあるま明白なり彼刀の地鉄小於我師の

鍛ハ亦我養又あれ師乃遺物又乃遺物小我こそ奪取て
 帯とをれ焉ど祐明小得さ守分死縋あらんし表小ハ祐明が頼小應せ
 舞小りくふ濱名城ハ込彼起竜丸を奪ハ使置しと英列主臣以封
 師又乃憤怒を休めんと首を定め稍色を和けく幾島小向ハ容易不
 らざる一義あましも左五門を見込く頼と越されハ成詩ハ命本意をねえ
 河の命小應ハ辟言く其刀鉄鎗石櫃小秘藏とも奪取く進くせあんと
 報せよ但一我濱名城ハ入ん火別小謀あり其手段日限ハ書中小徳め道
 小ハ祐明公乃外他見を憚る機密あまご私小同封さる事急思しと師
 時小一通乃及書を認め固く封く渡しを幾島大ハ悦ハ草袋小納め
 懐中ハ萬事可位頼と奉つといしと遂小眼を告阿波ハ嶽をそ立出る

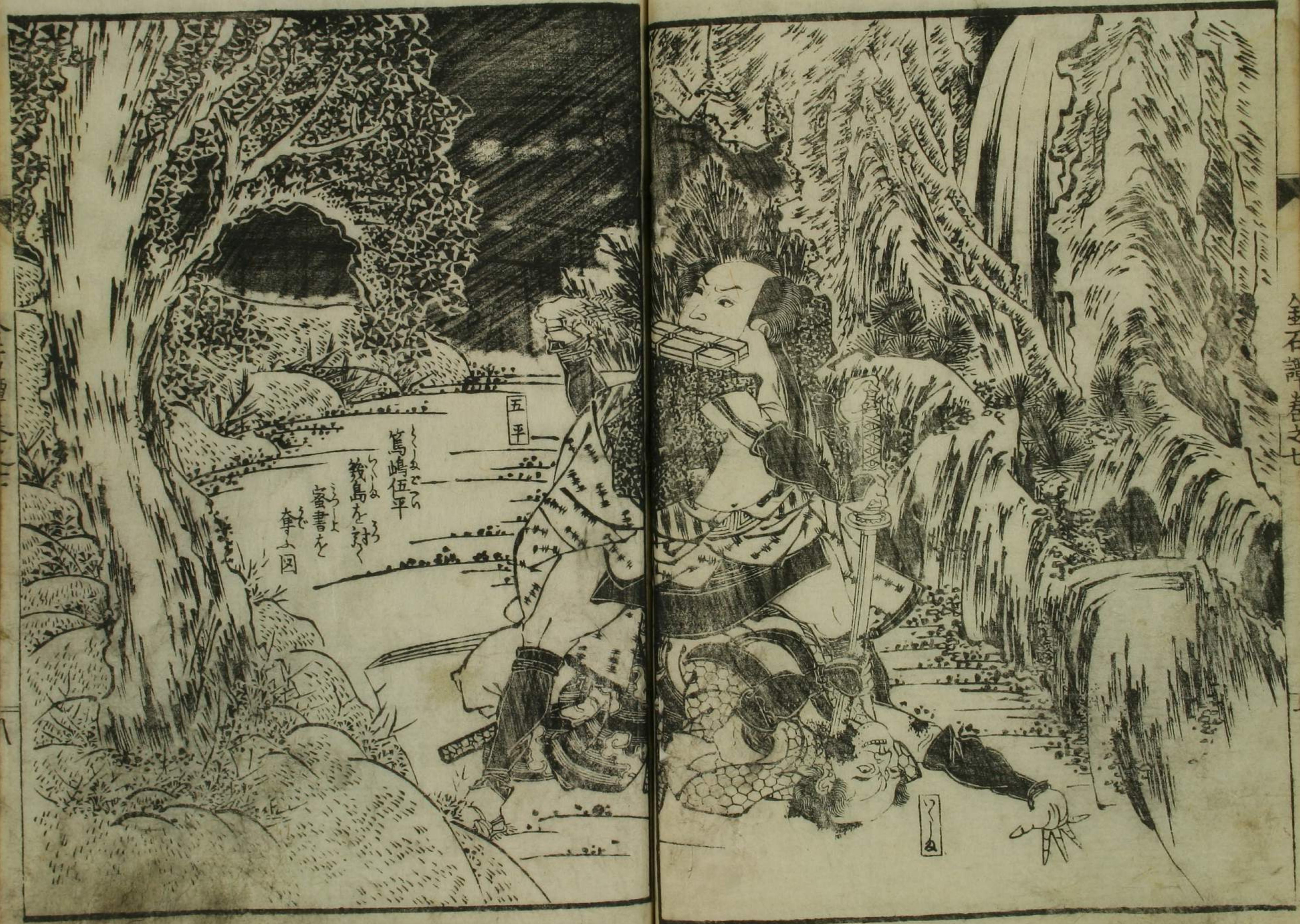
伍平対鏡嶋奪密書條

却就彼親本家乃奴隷嶋伍平八態と主小暇を乞播奪之助唐衣を伴
ひ京師を立々遠江國金谷の近村なる唐絹が凡川越り長造とよ者の方へ
尋下上之茲小身を倚く主徒三人食客となり居るが原来窮迫ふる長藏
あれを聊ふるも其煙乃代の資ふせん伍平八日々の街道小出々旅客の荷を
うだ或ハ其身一日小二十里を行送脚あれ日切時切り急赴脚小雇はれ走を
以々塩噌乃代小當る小其得る処長藏が儲小倍とれと播之助唐衣も頼
一免者小あり物足とふハあざれど其目を安く送りたり然る小伍平例の如
く江列へ乃急赴脚ふるく飯る小阿波々撤乃藍小こころ所小前路より
も笠深く被たる旅人た々其間三間許小成る小忽ち阿波が上

吹下し兩人の笠を吹上りうきうきと紐を吹切く三のせま風下送り散
行り伍平も旅客も惘果ありはと面を見合々う伍平太の小敬馬死ハ鏡嶋
兵藤あふとやりの主公小奮を勧め刺々大切ある香炉を白山より手ふる
渡り着殿小御不興を蒙り進せり我汝小行橋を尋れんと此年月
千三万方勞せし苦忠を上天憐れりい。今日只今此合せりふ人いさ速小
腕を曲く縛を受よと力腕撫り呼れむ兵藤ハ仰天折りてあま大切
ある密書を懐中せり面倒ある下郎小出會りふと心頼小遠逃避人と
とれど伍平眼を八方小賦まを適ま人やうくくやふ乃知る下郎一人何許
乃更あふ人討り捨て通人と言ひ言闕もせと腰刀是れと拔とる一
針と切てくふ伍平も心得はく一刀抜合せ切を拂ひ引を附込鋒より太化

を出し秘術をばくく切結ふ五小牛角乃手練ゆく俱小敷り処乃薄手
 を負ろろが伍平乃忠義我乃鋒銳く終小幾島がけの髪より腮をうけり切
 下たれむさし由乃兵藤あつと叫ぶ仰向小倒まぬ伍平得たりと兼うと止の
 刀刺通せむ七顛八倒く息絶たり伍平一息を吐生捕く曳飯理陰義
 乃種小せやく思ひ小勢ひむく得と討果せし残念さよきをわし若殿脚法
 糸乃種小あろ物ハあすやし懐中我披し足小革囊小入く堅く結り
 物あり何れんと取出しんろ小祐明公へ回報を左門とあり伍平肩を越
 り王家を逐電せし幾嶋館乃叔伯祐明公乃使者を承るこそ不審なき殊
 小渠乃為昧町人百性乃旅をさぐり紛装ハ必定密更乃使者と覺し何分
 此書中こそ姪しれ全君小早ふと脚飯泰乃道を南く枝折と感すし死ふ

あつとぞいざ片時も早く之飯らりちと手巾裂裂く疵毎小巻結り三十三安
 行歩ししが肚の内亦思及し否々祐明公兼く館乃機糸采を妬疾むろ意
 有とせむ如何ある大急の密事あるも知し是ハ若殿小呈せんより八濱名小到
 里多賀嶋主小呈さるるを近道をるべしと路を引及し手疵の若痛を
 去のひ足を宙小触り濱名へ到る小日既小暮るれが使更しと悦ひ忍んく
 多賀嶋が郎小寮内をを某小館小仕し篤嶋伍平ハ密小中上りた更のひを
 恐有しとあり伊織君小拜顔を終りありやうせむとて執次心得奥
 小入り勤し中折し伊織在宿しと在れむ伍平と笑く大悦定く若殿若殿
 若殿小尋途其を知せの使めんと人を拂く閑室小招れ入るるを篤嶋一別
 以来無更小有し先何より若殿乃脚身上氣遣し今ハ何國小脚座在と



五平

鴛嶋伍平

鴛嶋を討

密書を
奪ふ因

?

御身ハ御社健なりと拷へり向々多ふ。伍平頭を置か付先以て御安時ノ貴
顔を拜し恐悦ハ不堪。次ハ若殿の御妻ハ御不奥を蒙りて後ハ身を寄せ
あふ方もり。今金谷の宿近所ハ聊乃由所ありて身を寄るハ何卒御飯
乃道乃閉りて死手ガ重りて晝夜御意を困めり。其甲斐ガ原末を貧困
かり賤支ガ家もれハ御艱難中ハ命ハ守りて可憐彼香炉を背及て手段
あつ僕ホも世も業もろくハ肺肝を碎先心掛りて何乃仕出さる事
いれど然るハ今日河波ハ嶽ノ林あり先年逐電セ後嶋兵藤ハ端なく行達
須波ハ死手ガ重りて生捕人となりて源ノ刀を揮り向ひて己更を得た技
合せ薄手女ノ肩より終ハ我島を切倒し懷中を搜りてハ一書目を
所持し若御家の御為かり品あり奪取す是ハ持参なりゆして

若乃書書を取出し呈しこれハ伊織取上り上書目々愕然と前後り
氣を賦りて封押切り巻續ハ早め續更一返り大ハ驚愕ハ体ハ
巻返り熱々續大息吐き懷中一伍平ハ向ひて比書目々今日遅ハ我手
み入むいんハ珍更ハ及ハ命ハ早く手ハ入ハ主家の氣運未ハ傾ハ前兆あり
是偏ハ汝ハ忠義乃功あり程乃若殿御飯泰の道も閉りたど。今昔ハ
胸心ハ書目々守護ハ御迎乃到りて待て當時館乃叔父祐明主ハ心得りて
ろもそをれハ若殿乃御身ハ不慮乃御更有人ハ針きテ向後ハ他出を止り御
側を放まず立入者ハ心を付ハ程近ハ金谷ハ世を忍びハ手先達ハ息
息香ハ助ハ回ア達。若殿乃御更を純ハ都近ハを尋りテ命セテ定カ尋
コバハ其初ハ其ハ六角乃郎ハ情を悦ハ謝りて忠ハ情

追取困^{あつり}如何^{いり}や旅客^{りやくきやう}懐中^{わいしゆう}乃^{なり}路費^{ろひ}を投出^{なげだ}して通りぬ^{とほりぬ}異口^{いこう}の呼^よび
 されむ。伍平^{ごへい}呵^あ々と笑^{わら}ひ夜盗^{やとう}を苦^{くる}みとせむ。似^にげたり目^め慮^りる悪^{あく}者^{もの}の
 ろ我^{われ}ハ此^{こゝ}蹊路^{せきろ}を昼^{ひる}夜^よもい^いず。性^{しやう}及^{およ}ぶ鎌倉^{かまがら}靴^{くつ}もあ^あら知^ちら^ら無^な益^{えき}
 口^{くち}を叩^{たた}く入り路^ろを問^とた^たく通^{とほ}せよと云^い放^{はな}し自^{みづか}若^かく^く行人^{ぎやうじん}手^て偷^{ちゆう}見^{けん}も
 尚^{なほ}五^ご塞^{さい}ま^まく大^{だい}の怒^{いか}り。靴^{くつ}ふも雲^{くも}助^{すけ}のま^まれ我^{われ}徒^たが言^{ことば}をけし上^う酒^{さう}
 價^てを取^とり通^{とほ}さ^せる。路^ろ費^ひを^を荷^か物^{ぶつ}衣^い類^{るい}ハ^ハを更^{さら}なり手^て巾^{きん}禪^{ぜん}道^{だう}
 中^{ちゆう}列^{れつ}剥^{はく}く酒^{しゆ}價^ひが當^{あた}り人^{ひと}と左^{ひだり}右^{みぎ}ト^トりは^は寄^より懐^{わい}中^{ちゆう}へ手^て袋^{ふくろ}を^を込^こめ
 つ^つ拂^{はら}ひ退^ひ少^{せう}分^{ぶん}を^を獲^とり摩^まら^ら蠅^{あひ}も悪^{あく}く働^{はたら}か^か二^につ^つけ^け首^{くび}を^を失^う失^うひ
 そと^{そと}懼^{おそ}ふ抜^ぬく刀^{かたな}乃^{なり}先^{まづ}に^に者^{もの}く^くと偷^{ちゆう}見^{けん}も^も帶^{おび}る^る刀^{かたな}抜^ぬ連^つく草^{くさ}す
 穂^ほ乃^{なり}乱^{みだ}る^るく^く無^な二^に無^な三^{さん}の切^きく^く蒐^{そう}る。伍^ご平^{へい}も一^{いち}期^きの^の大^{だい}事^じと^と金^{かね}湊^{みな}乃^{なり}痛^{いた}

を忍^{しの}び右^{みぎ}緒^お左^{ひだり}拂^{はら}ひ働^{はたら}か^か二人^{ふたり}を切^き倒^たし二人^{ふたり}の^の手^て袋^{ふくろ}を^を取^とり
 痛^{いた}く^く刀^{かたな}法^{はふ}自^{みづか}在^かる^る其^{その}身^みも又^{また}數^{かず}多^{おほ}手^て袋^{ふくろ}を^を取^とり眼^め眩^{くら}く^くし^しら^らを
 賊^{ぞく}の中^{ちゆう}の^の首^{くび}領^{りやう}と^とん^ん荒^あ法^{はふ}師^した^たく^く切^き倒^たし足^{あし}下^{した}の^の踐^ふみ^み止^とめ^めを^を刺^さ
 靴^{くつ}の^の似^にげ^げたり^り多^{おほ}く骨^{ほね}を^を折^おせ^せる^るは^は懐^{わい}中^{ちゆう}を^を探^たり^り賊^{ぞく}布^ふ
 と^とり出^だし掌^{てのひら}を^を握^{にぎ}り^り舌^{した}を^を吐^はき^き是^{こゝ}ハ^ハ凡^{およ}十七^{じち}八^{はち}金^{かね}り廿^{にじ}金^{かね}ハ^ハ在^ある^るや^や牛^{うし}よ
 扱^お不^ふ意^い死^し鳥^{とり}あ^ある^る在^ある^るを^を一^{ひと}人^{ひと}乃^{なり}男^{おとこ}の^の呵^あと^とと^と骨^{ほね}の^の折^おし^し甲^か靴^{くつ}及^{およ}ぶ
 有^あり^りよ^よと^と手^て負^おを^を肩^{かた}の^の掛^かけ^け何^{なに}地^ぢも^もな^なく行^い去^さり^り此^{こゝ}賊^{ぞく}ハ^ハ是^{こゝ}別^{べつ}人^{ひと}の^の手^て袋^{ふくろ}乃^{なり}汝^{なんぢ}
 彌^よ難^{なん}念^{ねん}中^{ちゆう}の^の彼^か狭^せ衣^いを^を拘^かり^り人^{ひと}の^の賣^う渡^わせ^せ後^{あと}ハ^ハ悪^{あく}行^{ぎやう}愈^い増^{ぞう}長^{ちやう}今^{いま}ハ^ハ暗^{あん}闇^{あん}の^の牛^{うし}
 と^と共^{とも}の^の二^{ふた}玉^{たま}左^{ひだり}玉^{たま}の^の手^て袋^{ふくろ}今^{いま}年^{ねん}慶^{げい}の^の念^{ねん}と^と異^い名^なせ^せり^り悪^{あく}僧^{そう}なり^り

騙局露頭二玉刺妻賀嶋條

人しんがぎと高議たかぎといん異論いろん區まくく更さら小一定せいでい廿に所詮しよせん内見使ないけんし御對面ごたいめん有あく
 美吾みごを窺うかがひい弥正使やせいし亦また絶たたた謀まももここここ小こよりより祐明すけあき然しかして
 直ち濱は名なへへ赴ゆたた多た斯す々々多賀嶋たがしま八客舎はちきゃくしゃを拂はらひき清きめめせせ萬まん乃の用意よういをを備び
 つく内見使ないけんしを待所まちどころ小三日せんにちを過すく先走せんそうの既侍濱名城せいたひらなま小来こ將軍家しやうぐんけ乃の
 内見使ないけんし四官殿しごうだん今日けふ當城あつらふ入い来きゆゆと報ほうと多賀嶋たがしま心得こころえく士しを城外けつがい小出こく
 迎むかへむかひひ小こ程ほど乃の四官刑部しごうけいぶ左門さもん日勢ひせ亡な人ひと行ゆ小前後せうごををうう其身そのみハハ與よ小兼かね
 一いち看到けんごこれ濱名はな乃の家士けし是こゝを迎むかへむか城内じやう結むす小斯すと達たつとと小こ多賀たが
 嶋式しましき臺たい追出おしだ迎むかへむか其人そのひと品しんを窺うかがひひ隨從ずいじやうの士し小與よ乃の戸のをを開ひらきき出で出で小刑けい
 部ぶ左さ工門くもん身み乃の長六尺ちやうろくせふ有あ余あゆゆ色いろ白しろく眼光やうがん天暗あつれ乃の骨柄ほねがら乃の小四方しやうほう髪かみをを
 室町むろまち様さま小結むす上かみ白無垢しろむぐ乃の上かみ小花田はなうら尉斗ゑうと目めをを著きるる乃の麻あ縷いと乃の長上下ちやうじやう著き金造かねぞう

乃の大小ちやうせう斜せうきき悠ゆう々々と歩通あゆみるる一いち両量りやうりやうああるる武士ぶしとハハ乃の乃の伊織い是こゝを引ひ
 客舎きゃくしゃ小伴せうばんハハ段だんの席せき小結むす乃の小姓せうじやう茶道ちやうだう小命せうめい乃の茶ちや菓が乃の御食ご進しんをを方かたををうう
 英列えいれつ乃の名代なだい祐明すけあき存ぞん緒士しよ四五輩しごを徒たへへ出席しゅつせき上使じやうし小向せうかうハハ低頭ていとうて長途ちやうとの勞らうを
 緋ひ至し英列えいれつ頓とん小拜せう錫しやく乃の奉ほうるる乃の小物せうぶつ節せつ所ところ勞らう乃の起き居ゐ意い小任せんを是こゝ小依よ
 愚老ぐらう名代なだい成錫せいきやく乃の奉ほうるる乃の願ねがハハ台命たいめい乃の昔むかし某あハハ仰おほせ賜たまふふハハ低頭ていとうく
 刑部けいぶ左門さもん一いち揖い此度このたび東國とうこく筋すぢ巡行じゆんぎやうををここ別義べつぎ乃の先せん小山こやま名家めいけ
 通達つうたつせせ乃の来陽らいやう中ちゆう旬じゆん洛北らくほく金剛寺きんがうじ小於せう緒候しよこう乃の重ちゆう善ぜん展てん觀くわん有あせせ
 乃の小付内せうづない定さだめめ乃の品々しんしん小故障せうこさう乃の一いち應内見おうえんけん乃の台命たいめいを奉ほう王わう
 乃の斯す推すい參さんせせ乃の叔目録しゆくもく乃の順次じゆんじを乃の小當家せうたうけハハ神しん童どう乃の抱いだたた鉄てつ乃の制せい
 作さくせせ乃の秘ひ竜りゆう丸まる乃の人ひとの刀の記の乃の一いち應内見おうえんけん乃の人ひと疾はやく差出さしだすす乃の毎まい舌流しやくりゆう

が虚をうらひたり。二王左門ハ齒咬をきり此上ハ死尸の丘を築たれど望
 と掛くも飛竜丸を奪ぐ大う止むをて近臣ハお扮し賊小持しやる刀を
 追取見ると抜くと刃をえたるが先我二人ハ小賊が首をとりくとお落し續く
 近付捕人をき前後左右ハ切つ落を其刀法の鋭たし電光石火の激を
 ろじくやうやく内ハ十四五人筆を乱せ如く切伏らる其餘の輩も薄手
 重手を負我を忘まると引多賀嶋尚も緒士を尻す追々加勢を出
 くと八方を取圍せ余とすと探立をばしもの左門今ハ闘ハ屈しけり死
 中ゆ呪文を唱へ身を躍し坪の内へ飛下王築山ハ此方なる泉水の中
 へ飛入る多賀嶋續く地下王底の知る池の中ハ沈ハハ盤の裡ハ臭
 小比し手毎の水をくろく生捕小せよ池辺ハ下知しやるお思ハも

下ゆ水中より一口の短刀飛来つ伊織ハ喉輪をきり立多賀嶋老練の士ハ
 まるも急所ハ痛手ハあまし目と得と尻小倒しけしを伏捕人の者とも大
 小驚た浪波曲者ハ水中ハ在り油跡をせととを續く祐明多賀嶋ハ手を肩
 ハ成々々大ハ悦ハ躬庭へ走下下目ハ短刀を抜ハ抱むる体めりなり
 ハ柄ハ手成々けカハ任すると廻し終ハ刃を抜しけしを可憐さハの忠士呼し
 叫を限りし敢て呼吸ハ絶小たり祐明伴ハ敦圍ハ多賀嶋を害せし水
 中ハ曲者急ハ水を漂す生捕と賢ハさし指揮ハさし心得ハ捕人共
 水桶柄杓を手毎ハ持しりの巨池ハ水一滴も残らと漂湯しハ更ハ茶
 ハんをなれは是ハ不審ハ惱景各面を見合しハ忙然ハ行なり此時英列ハ
 本丸ハ在り緒士ハ下知を傳く居る多賀嶋飛劍ハ辱命を損せり

左工門
露頭
水中より
刃成船
ま賀嶋を
辨因



金石譜卷之七

とぞ仰天一手鎗ういばぐ近習五人
を隨へ狂氣乃てく客舎へ死ゆるる其強動

二王左門

譬る小物を上を下へと返へれば英列大いふ

是を制し曲者如何や向水申お能く終

めく汝を消行衛されなくとて英列齒咬

をを察する忍術あつて汝を消したるあり

急四方の城門を固め領地乃出づを多勢をりく守り

在る所を草を分り搜へ出へ搦れんと下知をばく畢

扱多賀嶋の死骸乃辺より五寄疵口を改めん咽論より背へ

賈るれんとんえ朱の漆く早息絶果れれば空し死面を亦守り兩眼亦降旧



雨乃てく意曇らせく云々やう噫呼如何あれを我股股腹心と頼と

賢士不幸ふくく二王の死兇職の為小命汝損へんを魂魄憤怒小とえ

はるは是皆國家を覆さんと練る奸惡の徒裡小あり汝身を非

命小死せとも尚一念乃神陽土を去むん承へん領へ賊目二王を始めと

一國家を窺ぐふ逆徒の首を斬垂ぬ汝が憤を慰め且香兵衛が申し

を尋て多賀嶋の家名を相續せしめん九泉の下より見聞く成佛得

脱せよと生る人ふりてく結明存を賧小けく云日統々が連も及らぬ妻あれ

を多賀嶋が骸が彼が邸へ送くも其身も本丸の飯を諸方の狂進を待た

出づを固り輩より早使をりてく普く搜へ雷ひとも怪くと思者一合

いふと報むる小と英列大い小氣を焦燥先達く搦捕へ賊目を引出し

強く呵責し何者か加膽し一質上使と成入込しとて跨向しをれも原より
此度乃巧ま左門一人の胃中内の秘を召連し賊ハ始より捨殺しおせん所
存をれと言甲斐も死草賊許めく其機密をまらず唯免しりて泣きあふ
乃外より更なる。英列も経とて都合十八人が首を悉く刎り鼻木の肆
尚も憤怒ふ不堪此六阿波が獄ハ勢をさへ向く二王を始其餘類を悉く
誅戮せんと敦圍にも他領をれを私兵馬を向んとも叶はざ先一徳京都ハ
辨ハ部下知を得て更を獲せんと早馬を以て京都ハ辨知中を及びり
扱も伊織が妻真秋は丈夫を刀を夢り行邊だ惑ひ空に死骸取とる
さても泣き泣き啼泣するも恨まも同一道中ハ阿ハ焦りたるを家族を
倚義長藏欲捨見信妻條

練め諭し泣き野辺に送る茶毘の煙とわ中陰のいづく執行ハ佛妻作
善の外ハ又他事もあつたり驚ろ小京都ハ上り槻本家の急使室町殿の
赦書を乞得く直にお返し英列の呈しをわぬ大に悦び此六阿波が獄
を襲ひて賊徒を獲ふせんと先河者を遣はし其動靜を窺はしむる其者死
飯をくやろハ賊徒早く脚催し瓜や知侍りてん阿波が獄ろ泉穴を焼拂ひ
一人も残さず百も者いりて報しをれを英列奉を握り手延おちて二王
を走らせろとて哭くといと怒り憤まも今更絶たせ死中より此上ハ極を
皆次第勢を向んと無念あつ其期を延らる伊織が妻真秋は是を傳
て朽惜と限らぬ既おまの申陰もとて家藏志賀藏ある者と高藏
吾傳女あつ武士の妻とるわ丈夫の仇と俱天を戴らんハ無下言甲斐あ

々る小播大之助ふと風邪小侵れて假初乃中乃少引。醫曹薬を西へて用中し之也。
 年来う心氣の疲り業也。次第小疾病となりて遂に疲症と成て。飲食共小
 慶と云ひり。危くんをれに唐胡が教た長藏丈婦が教た大方あり遠也
 の醫曹を迎へて治療を乞ふ緒。医病者を診脈し容射を窺ひて是ハ
 治療を施すと命死期後まされ快復と云ふ道なり。と云て下とて因も有
 ざる小一人乃老医乃言々るハ此病者未だ死症も定めざるされ此症を心
 寒下熱の症と云ひて大人参を以り依り用ひされ快復せん更覚束ありと云
 り。長藏亦女一胸を安んじ。扱其薬種ハ何行へと云るや。同小医乃曰く當
 時ハ大人参の價殊小貴けれ。十金り十四五金の手當なく。小命を浴し能
 ず。見受し所物足り。小体も有され。黄金乃綱達。

へもれ。人の命を買とて思ひ成。毎ハ綱達。と云ふ人參。小用ひる。病
 者乃命ハ。愚老乃海ひ。人參。信。と云ふ。云。此。医。ハ。我家。と。飯。と。云。の。迹。を。三
 人面を見合せ。ゆ。ね。小。食。り。た。小。使。と。廿。平。の。飯。と。播。大。之。助。が。長。た。患。病
 小。夫。妻。の。者。が。持。ち。小。任。せ。と。僅。小。残。り。物。ハ。小。薬。乃。代。小。估。拂。ひ。今。ハ。之。分。た
 煙。と。小。いと。絶。と。感。の。さ。小。は。を。り。乃。人。參。科。い。と。久。綱。布。死。と。互。小。口。ハ。云。ね
 と。小。心。乃。内。小。當。惑。し。只。吐。息。と。行。を。り。捕。有。く。唐。胡。長。藏。小。向。以。色。を。以。て
 ぬ。原。ハ。吾。侪。乃。更。下。り。起。上。玉。を。く。流。路。世。侍。と。い。ひ。吾。侪。を。再。度。若。思。小。洗
 め。其。身。乃。代。り。く。人。參。を。綱。至。乃。病。を。癒。し。と。い。ひ。と。泪。あ。が。り。小。云。れ。ハ。長
 藏。乃。妻。の。岸。當。藏。乃。男。子。小。乳。を。會。あ。が。り。曰。は。さ。る。处。理。乃。中。乃。理。ふ。が。脚
 身。着。病。志。む。ハ。他。の。人。の。扱。ひ。乃。脚。意。ふ。く。あ。ら。う。侍。と。い。ひ。人。參。科。乃。り。り。い。と。

うもあり侍も嗽たもふけをひのうえ侍も先脚側へ往く脚薬進せり
勸也と後ゆく長藏の向ひ云々何人參を用ひて八叶をてて年頃
時も傍を放ちてむらがる唐絹玉を引か玉の力を落しむ人參の力
も甲斐なく逝去りまも侍も何れも後ハ悔とも及ぶ吾侍も
主は似るもむねがれ無下小半の周りとありあらず吉田岡崎乃阿娼
小五年六半身を賣りて十兩の金を得ててもあらず唯身の足ハ此兒あり脚身
心一つ何國の數へも捨てよと云曇らせと耳給たれ長藏も泪小鼻を
結せく美健氣の中ハくく妹ハ恩人へ様をまて再度我身を留くんと
つハ脚賣分る我兄妹ハ義をまて憂阿娼の身を賣んとの志何きを
う捨りれを取んて脚賣のり病入の心を安んむるハ妹を

か如くありとてり脚賣を賣ん不使ある兒を引かてハ叶をて生る一年と
も徑がれ人の遣人ゆ此乃銀育料を添れ承引人も有まるとり街
ふ捨れ大狐ゆ喉をあら右ゆ左ゆを負死行心苦死物ありと斯
乃と暮る病者ハ萬一乃更りて是れ盡せし志も水乃泡とあふ死
あれどや心を鬼ゆ今宵潜り捨人一期乃別はかりと乳を飲せ
く腹を置よ我ハ肝煎乃瓜作う行行萬乃更頼まて来んてハ妹
病者も此更細く覚らるあぞ悲しくも目の中ハ泪を洩れと練其
身乃目ハ早泪血ハ経袖時兩膝や紅葉ハ染り人折し由野寺乃晚の鐘諸行
無常と告りて長藏佐と心成房にせし事を練死せりとて出行
たる迹ハ岸が泪あがり破土音ありて燈も心くを子故乃闇熟く病る雅

愛乃良をふがもく、雨に降、泪も氷る冬嵐鳥肌、懐より、あけ出、下
 痛ませ、背ののうち、温れと、幾重乃小利、歩重ね、縫、針目、二重も
 三重も、子著せ、大狼乃難除、ゆ、紐、結、糸、札、守、頂、目、注、を、と、う、ま、ん、と、鴨
 居、の、釣、一、つ、春、の、捨、命、死、時、の、用、小、と、八、初、う、ぬ、ま、の、を、と、云、て、八、注、取、ま、う、一、つ、下
 小敷、襪、の、針、目、甲、甲、を、く、く、親、子、の、縁、乃、ま、れ、ふ、別、う、一、と、八、今、追、も、お、り、と
 かく、を、と、云、く、八、か、死、あり、我、子、成、捨、め、か、心、構、を、を、と、折、し、の、奥、小、腹、に、播、ナ
 之、助、唐、絹、も、り、ら、と、も、い、ゆ、や、と、高、く、叫、ぶ、ぞ、岸、大、の、小、歩、を、ら、た、巻、か、り、く、つ、が
 兒、を、抱、え、奥、乃、向、き、と、ど、り、入、る、此、後、乃、更、如、何、あ、る、や、其、と、次、巻、を、と、ん、と、知

四六巻一

繪本金石譚後篇卷之三畢

